

タイトル：おじさんとの一日

学校名・学年：関西創価中学校・1年

名前：石原 花凜

(本文)

私のおじさんとの特別な日がやって来ました。おじさんは、知的障害を伴う自閉症です。そのおじさんと一日を過ごす日です。おじさんはいつも通り、明るい性格なので、おじさんとの時間を楽しみたいです。

おじさんは私のお父さんの弟です。

お父さんの話では、おじさんが赤ちゃんの頃、高熱が何日か続き、障害が残ったということです。おじさんが小さい頃は、多動で、少しでも目を離すと、どこに行ってしまうか、わからなかったそうです。お父さんは夏休みには、共働きの両親に代わって、おじさんを毎日探し回っていたそうです。時には、海に落ちていたり、警察に保護されていたり。でも、今は、そんなことがあったのが信じられないほど静かです。

おじさんは朝、お父さんと私が訪ねてくるのを心待ちにしてくれています。

午前10時、おじさんのいるグループホームに到着しました。おじさんは笑顔で迎えてくれます。お父さんとの再会は温かく、兄弟の絆を感じます。

私達はまず、祖父母のお墓参りに行きます。そして静かに手を合わせ、水をかけます。

お墓参りの後、昼食を食べにおじさんの希望の中華料理か、ハンバーグ屋さんに行きます。おじさんは父と私と一緒に座り、静かに美味しい昼食を楽しみます。私より食べる速度が3倍早くて、出されたものは必ず完食します。私が小さい頃は、私が食べれなかったものを食べてもらっていました。おじさんが小さい頃は、食べ物の好き嫌いが激しくて、本当に好きなものしか食べなかったそうです。でも今のおじさんからは、想像できません。何でも食べているイメージがあったからです。

食事の後、まず、近くのスーパーに行きます。そこで、新聞とデザートのおレンジジュースとプリンかアイスクリームかスナック菓子を買います。

スーパーに行った後は、本屋に行って、おじさんは、なにか独り言をブツブツ言いながら、本屋の中を歩き回って、自分で好きな鉄道の本を選んでいきます。おじさんは棚の本をじっくりと見て、興味深そうに本を手にとって、お父さんに渡します。そして、その本を買ってもらっている姿を、私は微笑ましく見ています。ちなみに、グループホームでは、週刊のテレビ番組の雑誌と野球の雑誌を取っているそうです。

私が小さい頃は、なんとも思っていなかったけど、小学校高学年になって、おじさんと居ることが恥ずかしいと思うこともあります。お父さんもやっぱりそうだったそうです。

夕方になると、私達はグループホームに戻る準備を始めます。その時いつも、おじさんは、車の中で、買ってもらった鉄道の本か、新聞をずっと読んでいます。

グループホームに着くと、私達は別れのあいさつを交わし、次の訪問を約束します。

そして楽しかった一日を振り返ります。私の心には、家族の温かさと絆が深く刻まれています。次におじさんに会える日を楽しみにしています。いつまでたってもおじさんに会いに行こうと思います。

私はおじさん以外の障害者の人と接する機会がほとんどないので、町中や電車の中で、障害者の方はもちろん、車椅子の人や白い杖を持っている人や妊婦さん、お年寄りの方やヘルプマークを付けている方がいたらお手伝いしようと思います。